

(3) 出土剥片石器について

図Ⅵ-1は石鏃とスクレイパーについて、形態ごとに調査区内の出土状況を示したものである。本文で図示した以外のものについても、形状のわかるものは形態別のシンボルマークを付した。

石鏃については、緑ヶ岡式期と興津式期で違いがみられる。

緑ヶ岡式期のものは、有茎もしくは菱形のもの（●）また無茎のもので、側縁が直線のもの（■）が多数を占め、若干の基部が直線的で小型のもの（□）に少数の内湾する基部をもつもの（△）が加わっており、無茎鏃が多いものの、有茎鏃も若干数伴う状況を呈している。

興津式期のものは、F48において、小型の石鏃がまとまって出土している。図示していないものも含めると8点が出土しており、全てが内湾する基部を持つものであった。最大幅が1.2cm前後の規格性の高いものである。他に興津式土器を伴うF76において、無茎でわずかに内湾する基部のみが出土している。図示していないが、■の凡例で示した。よって興津式期は無茎鏃のみが出土している。

江別市対雁2遺跡において石鏃の形態変化を検討した酒井秀治は、有茎鏃から無茎鏃への変化を層位的に説明している（酒井 2005）。酒井はその変化の時期を「樽前c火山灰降下から少し経過したころ」としており、その変化が当地でもほぼ同時期であった可能性を示しているものとみられる。

スクレイパーについては、時期的な差異はみられないが、円形に近い剥片を用い、急角度の刃部がつくいわゆるエンドスクレイパー（▲）は遺跡中央部の2ヵ所にまとまる傾向がある。特にF20からはその破片が3点まとまって出土し、隣接するF19からも完形のものが出土している

3 緑ヶ岡式土器について

(1) 上茶路遺跡出土土器の編年的位置づけについて

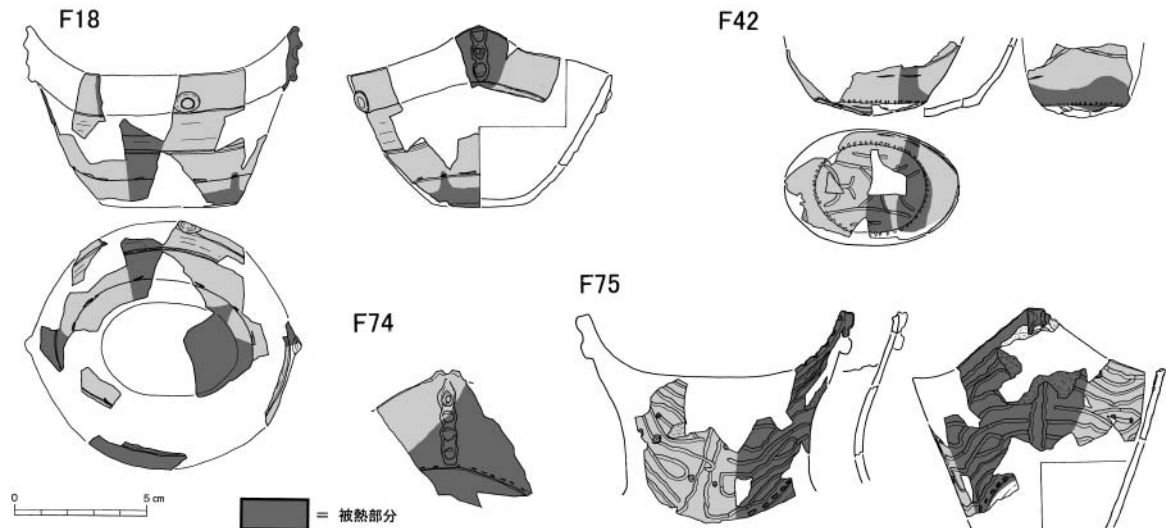
出土した土器の大多数を占めるのは、緑ヶ岡式土器である。緑ヶ岡式土器とは、釧路市緑ヶ岡遺跡出土資料に基づき河野広道が命名したものである（河野 1959）。西 幸隆はその経緯について、緑ヶ岡遺跡の北側の台地から出土した一括土器をもとに設定したとしている（西 1994）。

設定時には器形について、深鉢を主とし、皿、甕、壺、双口土器、稀に注口土器があり、文様については、縄文、撚糸文、貝殻文、条痕文、沈線文、刻文、刺突文があるとされている（河野 1959）。その後増加した出土資料を検討した鷹野光行は、器形については舟形土器を、文様については綾絡文（結節回転文）をこれに加え、器形上の幣舞式との相違点として、口縁部下部の頸部に相当する部分に段や高まりがつくられることがあるとし（鷹野 1983）、また沢 四郎はこの緑ヶ岡式には亀ヶ岡式を伴出しないことを指摘している（沢 1987）。

本遺跡出土資料はこれらと矛盾がなく、緑ヶ岡式のまとまった資料といえる。

さらに詳細な区分については、緑ヶ岡式土器は設定当初から2～3の型式にわかれる可能性が指摘されており、その新しいグループには沢によれば「工字文の崩れたような沈線文を口縁部に有する土器がみられる」という。

これを踏まえて赤石慎三は緑ヶ岡式を新古に二分し（赤石 2001）、大沼忠春は緑ヶ岡式に対して2型式の幅を与えている（大沼 1986）。大沼は道東地区の資料として、緑ヶ岡式の古手に北見市栄浦第二遺跡13号堅穴ホ号住居床面出土資料（佐藤ほか 1972）、新手に北見市中ノ島遺跡出土資料（久保 1978）を挙げている。上茶路遺跡出土資料は、深鉢の器壁の角度や、舟形土器のあり方などからすると、どちらかといえば中ノ島遺跡の出土例に近いが、綾絡文の多寡や貝殻条痕文の有無など、いくつかの相違点がある。



図VI-2 舟形土器の被熱部位

また、本遺跡には図IV-20-15に連続波状沈線文の施文されるものがある。これは赤石が緑ヶ岡式の新段階とし、大沼により緑ヶ岡式最末期とされる、新冠町氷川遺跡（愛下 1975）の深鉢口縁部、三石町旭町1遺跡（北埋調報10）において壺の肩部に多く確認できる文様に類似しており、同様な文様は白糠町オネチカップ遺跡（富水 1966）、釧路市幣舞遺跡（石川 1996、1999）の同時期の資料にも認められるものである。また、栄浦第二遺跡において、この文様そのものではないが、この時期に相当するとみられる沈線文が施文される土器が確認されている（大貫 1995）。

本遺跡のこの資料はTa-aより下位の資料ではあることは確かであるが、表土除去後の表採資料であるため、この沈線文がまとまりとして一括できるかどうか、またこれを含めた緑ヶ岡式内での詳細な位置づけは今後の出土例の増加を待って結論すべきであると考ええる。

(2) 舟形土器について

本文中に若干触れたが、舟形土器は、ほぼ全て全体の器形のわからないものであり、接合する破片も少ないものであった。これらはすべて二次的に焼けた部分があった。図VI-2にその部位を示した。舟形土器は全て焼土中からの出土であることから、二次的に焼けた部分があるのは自然なことであるが、本遺跡の一つの特徴とみられるため、付記しておく。

4 まとめ

上茶路遺跡の特徴をまとめると以下の5点となる。

- (1) 検出された焼土は縄文時代晩期後葉、緑ヶ岡式期と、続縄文時代初頭、興津式期の二時期のものがある。
- (2) 焼土からはニホンジカの焼骨が多く検出され、わずかに魚類、鳥類、海棲獣類が認められた以外には検出されなかった。ニホンジカの出土部位は角がないなどの傾向を示している。
- (3) 焼土の燃料材は緑ヶ岡式期にあってはサクラを主とするものであったが、興津式期にはトネリコ、カエデ、ミズキを用いており、緑ヶ岡式期にはクルミが出土し、興津式期にはブドウなどの種子が出土している。
- (4) 石鏃の形態は、緑ヶ岡式期には無茎が多いものの有茎も出土しているが、興津式期には無茎のもの